

TEIKOKU DATABANK
HISTORICAL MUSEUM

Muse

帝国データバンク史料館だより
[ミューズ]

2019.1
Vol.33

Muse
Talk

ミューズトーク

時代を繋ぎ、 未来を紡ぐ 囲碁アーカイブズ

1300年の歴史と記憶をいまに伝えて

囲碁殿堂資料館 学芸員 齊藤讓一さん

日本アーカイブズ学会登録アーキビスト 松崎裕子
アーカイブズ探訪記 第4回 森永製菓株式会社

《里山の逸品》山の塩、つまもの、和楽器絃

時代を繋ぎ、未来を紡ぐ囲碁アーカイブズ

1300年の歴史と記憶をいまに伝えて

囲碁殿堂資料館 学芸員 齊藤讓一さん



齊藤讓一さん

1978年生まれ。2001年東京学芸大学教育学部卒業。
大阪商業大学アミューズメント産業研究所特別研究員を経て、囲碁殿堂資料館設立時から携わる。

日本の囲碁界の土台をつくった徳川家康

囲碁の起源は4千年前の中国といわれていますが、これには諸説あり、はっきりと分かっていません。日本には仏教や漢字とともに大陸から伝わってきたと考えられています。碁盤の目は縦横19路361目、太陽が天を回る日数といわれ、春夏秋冬の四季を表していたことから、暦や易としても使われていたようです。

囲碁は、宮廷や貴族の間では教養としてたしなむものでした。それが鎌倉時代から室町時代にかけて公家から武家へ、地方へ大衆へと広まっていきます。

地位の高い人は囲碁を覚えなければという意識もあつたでしょう。戦国武将が囲碁を好んだという話には戦略や政治とからめ

て語られることが多いですし、毎年のように大河ドラマの中では武将が碁を打っています。

中でも徳川家康は碁が好きだっただけではなくて、強い碁打ちを集めて碁の会を開いたりその人たちに地位を与えるなどしました。この人がいなくなったらプロ棋士制度は生まれなかったかもしれませぬ。1626(寛永3)年に京都二条城において、その後は江戸城で年に1度、将軍の前で碁を披露する「御城碁」を始めましたが、そこに立つことは、碁界のトップに立つことを意味しますから、当時の棋士たちは御城碁を目指して努力していたと思



1834(天保4)年に発行された碁番付(碁殿堂資料館所蔵)

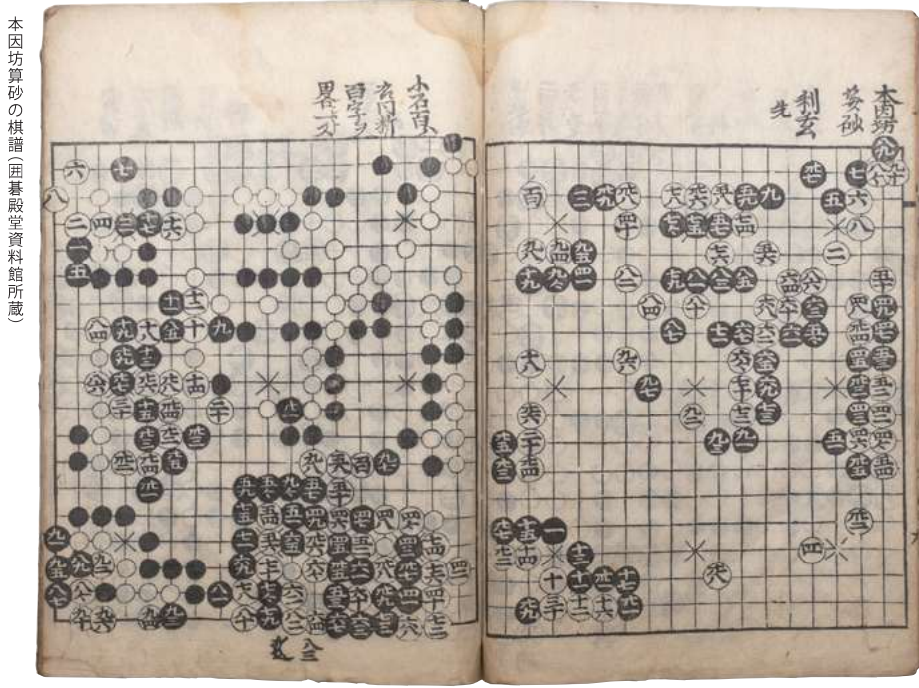
ます。江戸時代後期には囲碁番付が出されるなど、広く民衆にも楽しまれ、世間の人々の関心が高いことが分かります。

日本棋院創立、そしてミュージアムの開設

明治になると幕府の庇護を失ったプロ棋士たちが次々に団体を設立し、それぞれ活動し始めます。しかし次第につぶし合いのようになり、まとまろうという話になって日本棋院が設立されました。19

24(大正13)年のことです。日本棋院の創立は大倉財閥の大倉喜七郎の尽力によるところが大きく、永田町に建物を寄贈してくれ、創立間もないころはプロ棋士の給与も肩代わりしていたと聞いています。71(昭和46)年末に、いまの市ヶ谷に移転してきました。日本棋院には、個人の収集家から寄贈されたコレクションを含めた膨大な史料があり、移転当初からミュージアムをつくる構想がありました。

2004(平成16)年、日本棋院の創立80周年事業の一環として囲碁殿堂資料館がオープン。私は資料館の立ち上げから



本因坊算砂の棋譜(囲碁殿堂資料館所蔵)

関わり、現在に至っています。私自身はそれまで囲碁を知らず、ここへ来て初めて囲碁に触れ、歴史を勉強しました。囲碁の歴史は、ほとんどの人があまり気にしない存在です。遊びが多様化して細分化されたいまの時代、囲碁はそのひとつでしかないのですが、これだけ歴史があり、大勢の人が楽しんでいる遊戯はおそらく囲碁だけではないでしょう。黒と白を交互に打つ、囲んだ陣地が多い方が勝つという囲碁の基本的なルールは変わっておらず、よく千年以上も伝わってきたと思います。また、当館では江戸

時代からの棋譜を数多く収集しているのですが、それらの保存や公開を考え、デジタル化を進めています。すでに個人のコレクションや研究者も始めているのですが、難しいのは統一された規格や仕様でないことです。いつ、誰の対局なのかの情報が抜けていたり、写している間に間違えたりと課題は多くありますが、資料館としては、こうした歴史や記録を伝えていくのがひとつの使命だと思っています。

AIが教えてくれる棋譜というアーカイブズ

対局記録を棋譜といい、プロ棋士の棋譜は基本的に残されています。本因坊算砂(1559~1623)は第1回囲碁殿堂入りした名人ですが、彼の時代にはすでに棋譜がとられ、残っています。棋譜は本にもなったので、昔の人は棋譜を見て勉強したという話を聞きます。

棋譜は江戸時代だけで1万局ぐらい残されています。家元四家という制度があったのですが、その四家が競い合ってきたから、多くの棋譜が残されたのだと思います。家元で秘蔵の棋譜があるにしろ基本的に四家とも棋譜をオープンにし、本にして刊行していました。

いま、あらゆる業種にAI導入の研究が行われています。ボードゲームの分野でも早くから研究が進んでいて、チェスに続き、将棋や囲碁もプロを負かすAIソフトができています。かつて囲碁ソフトの開発は、囲碁の強い人がコンピューターに何万局もの棋譜を覚えさせていったものですが、いまは全く囲碁を知らない人がコン

ピューターにルールだけ教え、AI同士で対局することで学習させていくという、棋譜知らずのAIが主流になりつつあります。興味深いのは、そんな棋譜知らずのAIが打ち出す手で、いまは使われなくなつた江戸時代の戦法が使つていたり、古くなって誰も見向きもしなくなったような打ち方をする。それが分かるのも棋譜という記録があつてこそだと思っています。



価値と感動を伝える 「食」とアーカイブズの繋がり

日本における西洋菓子の製造販売事業のバイオニア、森永製菓株式会社は今年2019年、創業120年を迎える。アーカイブズ探訪記第4回は森永製菓のアーカイブズである同社史料室を訪ねた。同社は「おいしく、たのしく、すこやかに」を基本理念とし、「バイオニアスピリットに溢れた企業活動を通して、価値と感動のある商品・サービス・情報を提供」することによって、「世界の人々の豊かで安全な食生活の実現と健康の増進に貢献」という使命を掲げている。同社アーカイブズの沿革と最近の取り組み、特に社外の専門家との連携による資料の整理や目録作成業務、長い社内でのキャリアとアーカイブズでの業務をどのように結びつけて、アーカイブズの価値を高め、会社に貢献するのかといった点について、同社史料室の須古邦子さんにお話を伺った。

松崎 裕子

日本アーカイブズ学会登録アーキビスト

森永製菓と史料室の沿革

森永製菓は、現在の佐賀県伊万里市出身の森永太郎（1865～1937）が、米国滞在中に身につけた西洋菓子製造技術を日本に持ち帰り、1899（明治32）年に「森永西洋菓子製造所」を開設したときに始まる。120年に及ぶ長い歴史の中で、同社はこれまで、『森永五十五年史』を1954（昭和29）年に、『森永製菓一〇〇年史』はばたくエンゼル、一世紀』を2000（平成12）年に刊行している。須古さんによると、実は社史発行は右記2種以外にも計画されていたことが残された資料から分かるという。例えば、未刊行の30年史、発達史、80年史のゲラが伝来している。

現在の史料室は、1991年に社内広報部が発足した際、正式に誕生したものである。2000年に刊行の100年史編纂に向けて、史料室には事務局に加え、社内各所から協力員計15名超のスタッフが集められた。刊行後、



創業者の像

史料室スタッフは減員され、従前から管理してきた資料に加え、年史刊行のために収集した資料の管理のために、須古さんの前任者が史料室に異動してきたのが03年である。このときに、多くの貴重な、しかし利用される機会が少ないポスターなどのモノ資料を活用するために、アナログの資料リストを代替するスプレッドシート形式の目録データベースが作成された。これによって検索が格段に容易になった。さらに所蔵資料を利用してこんな展示会が出来ますよ、という提案書を作成し（2010年3月）、社外に向かって発信するというユニークな取り組みを展開している。これが功を奏して、その後たばこ塩の博物館（2011～12年）、もりおか歴史文化館（2012年）、創業者の故郷である佐賀県立博物館（2014年）等と「連携」して、森永製菓の企業資料を用いた展示会開催を実現している。

森永製菓史料室所蔵資料の概要

森永製菓史料室が所蔵する資料は総点数が4万点以上、種類と数量（概数）は次のような状況である（2018年現在のデジタル化は20%弱）。

- ポスター… 2000枚強
- ガラス乾板… 3000枚強
- その他資料…
 - ダンボール600箱
 - スクラップブック1200冊
 - アルバム70冊
 - 新聞広告スクラップ100冊
 - 映像史料室DVD300枚
- ファイリング…
 - キャビネット6段 写真カード8段
 - 写真キャビネット20段

森永製菓史料室所蔵資料の特徴は、広報的なものの点数が非常に多く、経営資料はわずかな点である。しかし、これを補う貴重な資料として、社内報がある。社内報には商品の発売時期、その一覧表、パンフレットなどが掲載されるので、経営資料を欠いていても、社内報を追っていくと、大体会社の経営の様子や商品、さらに役員・従業員についてほぼもれなく知ることができる。社内報は貴重な企業資料である。史料室には昭和初期からの社内報が全て揃っている。

もうひとつの特徴は、「モノ」資料が多い、ということである。キャラクターを切るハサミ、戦時中に作っていた軟

膏、キキとララといったサンリオ関係やディズニー関係のキャラクターもののパッケージ、慰問袋に入れた女優カードなどを拝見した。



モノ資料が整然と並ぶ史料展示室。一般公開はしていない

資料整理、目録作成、修復保全、 デジタル化での社外エキスパートとの連携

2016(平成28)年頃から、須古さんは資料倉庫の整理と目録の再整理に着手し、さらに18年からはデジタルアーカイブ化の再構築に向けて準備を進めている。16年

スタートの目録再整理とは、アナログ時代に時々の担当者が各人各様のやり方で作成していた複数のリストを、メタデータ項目を一致させて統一のフォーマットでひとつの目録に統合する取り組みである。一方、後者のデジタルアーカイブ化の再構築とは、従来のイントラネット内の基幹的な画像データベースと、その他にもいくつか存在していた資料管理のためのデータ、例えばモノ資料のメタデータなどを全体としてひとつのシステムに統合する作業である。これまでは、史料室の担当者の熟練やカンに頼っていた検索作業を、社内の誰もが無理なく行うことができるように、という趣旨で取り組んでいるというお話であった。

ただこの取り組みを実際にスタートさせるには時間が必要であった。須古さんは、もともと広報出身であり、企業価値を高めるための資料の活用は、ある意味得意分野でもあるが、活用するための資料整理、保存や修復の手当て、目録データベースの整備、デジタルアーカイブ化、あるいは史料室コレクションの対象外と判断したものの処分といった、一連の資料管理業務に対してどのように取り組むべきか時間をかけて検討する必要があったからである。

そこで須古さんがとった戦略は、博物館と協力して社外展覧会を企画したときと同様の考え方である「連携」である。資料整理のスキルや経験のないアルバイトからいちいち指示を仰がれるような状況ではなく、資料整理のマネジメントもしてくれるところと一緒に仕事をしたいと考えた。このような形で協力して仕事を進めることができるカウンタパートをようやく見つけることができたため、これまでバラバラのサイズの段ボールに入れて、寄せ集めの棚に配架していた資料ダンボール箱600箱分を、中性紙箱に入れ替えて、さらに箱の中の資料目録も作成してもらうという、一連の業務をこのカウンタパートに任せることができた。この作業は半年かけて完了している。

須古さんは、「いま多分ほかの企業さんがすごく求めていることなんじゃないかなと思うんですよ」と言う。専門スキルのない、例えば学生アルバイトに頼んで、一日中

「ここはこうして」「あそこはこうして」と指示を出すのではなく、資料整理や目録などの検索手段の作成に関して、ある程度任せられる信頼できる専門的なパートナーとの間で、先方からの提案も受けながら仕事を進めていく、というやり方である。

本社だけでなく、鶴見の分室にあった資料も同様の方法で整理し、その中でも社会的に貴重な昭和初期の業界誌数十箱分を慶應義塾福沢研究センターに寄贈している。寄贈の際には、何十年分もの埃を払いクリーニングした資料を中性紙箱に納め、全点の目録リストを付けた。この資料は、社会的に貴重なものではあるが、森永製菓の史料室のコレクションとしては今後利用の可能性がないものであり、ここで引き取ってもらえないと、利用しないにもかかわらず自社で保管コストを今後何十年にもわたり負担する、または廃棄することになるという理由から、このような方法によって寄贈が行われた。同様の理由で、蔵資料のうち16ミリフィルムも専門の会社に依頼して、全部クリーニングしてデジタル化した上で、東京国立近代美術館フィルムセンター(現在は国立映画アーカイブ)に寄贈している。

森永製菓の企業資料の価値

直近の年史100年史刊行から18年が過ぎ、次の年史作成は日程に上っていない中、手間暇かけて資料整理と目録整備、データベース化、デジタルアーカイブ化を進める意義はどこにあるのだろうか。須古さん自身は管理栄養士出身で、もともとそれほど歴史が好きなわけではなかったというが、次のようなことを語ってくれた。

「うちの会社はお菓子の会社で一番古い。それに超えるものってないじゃないですか。やっぱり歴史は否定できない。だから、それを利用、活用、生かしていくのが森永製菓の史料室の役目だと思うんです。創業者の精神や会社がやってきたことのすごさとかというのは、過去じゃなくって未来に生きるもの。それが私が考える史料室のコンセプトなんです」

史料室は一般公開していないが、社員や取引先などの



倉庫には整理された資料の入った
中性紙箱が配架されている

係者にはほぼ例外なしに対応しているという。これには学術支援というCSR的な意味ももちろんある。だが筆者が興味深く感じたのはむしろ、研究者による研究成果によって所蔵資料に「厚み、深みが出てくる」という点である。資料は利用されてこそ価値を増す。

アーカイブズを社内キャリア／ ライフワークに結びつけ、 企業と社会に貢献する

資料整理・目録作成における「連携」ところでも触れた通り、「(日本の)企業のアーカイブスト」「アーカイブズ業務担当者」は諸外国のような専門職制度の中での就業、雇用ではないため、実務において戸惑うことが少なくない。須古さんの言葉を借りると、「自分はアーカイブストのようなアーカイブストじゃないような：自分の中でアーカイブストという認識はないですね」。

アーカイブズの仕事を資料整理・目録作成・修復保全といった方に傾けた場合、自分には当てはまらないというのが須古さんの考えである。お客さま相談室や広報部でのマスコミ対応というキャリアを持つこともあり、「集めてきた情報をどうやって外に出そうか、答えがないときはどうやってその相手の満足度を引き出すための答えをつくっていくか」と考える。情報提供した相手の満足度を上げて、結果、会社のブランド価値を上げるという点で史料室を生かしていきたい」という考えが須古さんご自身に最も当てはまるという。

そのような考えの延長線上で、須古さんは創業者の地元伊万里での森永の社会貢献活動に史料室の業務をうまくミックスさせている。地元の伊万里市民図書館には市民のイニシアティブで森永太郎コーナーが作られている。この図書館は市民がアイデアを出し合って様々な活動を行っているところであり、創業者森永太郎も大変大切にされているという。そのため森永製菓も、会社発行の書籍やビデオ、ポスターやパッケージのレプリカを提

供して、市民の活動に協力している。また、伊万里市内の大坪小学校では、4年生の3クラスが生涯学習の時間を一年をかけて、太郎の研究をしている。伊万里市歴史民族資料館の館長さんが学校で太郎の話をしたり、子どもたちは図書館で調べ物をする、さらに森永製菓も協力して、キャラメルのお話をする、といった取り組みである。この中で、管理栄養士の資格を持ち、食育にも積極的に取り組んできた須古さんは、「ライフワーク」「自分の強み」を持っていたいという考えから、キャラメルの歴史の授業とキャラメルフォンデュづくりのワークショップを受け持っている。2019(平成31)年の1月にはお菓子箱づくりを行う。「ハイチュウって実はキャラメルの進化版」といったお話、あるいは太郎が持ち帰ったキャラメルのつくり方など、歴史の要素を伝えながら、自分の強みである食育への取り組みの経験を生かすのが、須古さん流のアーカイブズとの関わり方ということであった。デジタルによる情報発信がますます盛んとなっている今日だからこそ、市民や子どもたちとの直接的でアナログな触れ合いは感動を生みだし、そこでアーカイブズが利用できる、とも須古さんは語る。

「自分のバックボーンや強みを生かしながらアーカイブズとどう結びつけていくか。そう考えていくとアーカイブズの仕事は楽しくできる」

資料管理のエキスパートの協力を得ることによって、須古さんは社内の非専門アーカイブストとして、アーカイブズを自分のバックボーンである広報やCSR活動に強みに結びつける仕事に専心することが可能になった。伊万里における取り組みは、食文化と企業文化の価値を地域の人々にダイレクトに伝える、ひとつの優れた実践例だ。

松崎裕子

アーカイブズ工芸代表。2001年名古屋大学大学院国際開発研究科修士、博士学術。2008年より国際アーカイブズ評議会(ICA)ビジネス・アーカイブズ部会(CBA)運営委員、2012年より企業史料協議会理事。2017年よりISO(国際標準化機構)TC46(情報とドキュメンテーション)/アーカイブズ/記録管理に関する標準化委員会(SC11)国内委員。

関係者を案内することもあるという。社内のマーケットターから「昔の〇〇ありませんか」とか「あのときの△△の資料ありませんか」など、いろいろな問い合わせがよく来るといふ。これに丁寧な答えているうちに、「史料室に聞けば分かる」「困ったときの史料室」というように社内でも評価されるようになってきたそうである。なんとどうれしい話であるかと、筆者は思わず微笑んでしまった。さらにマスコミからは、「あつ、森永に聞けば分かるよね」「何か出てくるよね」というように、必ずしも森永とは関係ない事柄でも、お菓子に関わることでの問い合わせがあるという。こういった問い合わせにも丁寧に対応する中で、信頼関係を築くことができると須古さんは解説してくれた。

資料にコンテキストを与え、価値づける

社内外からのレファレンスの要望に丁寧に対応するために、須古さんは、所蔵資料自体を読み込むことよって知識を深め、また背景となる世の中の出来事と資料を結びつける、あるいは他社資料も可能であれば参照する努力を行っている。これはまさに、資料にコンテキストを与え、価値づけを行うことを意味するだろう。

一方、資料閲覧を希望する研究者、学者、学生等学術関

里山の逸品

身近な森林として
人々が手を入れ、共存してきた里山。
そこには、自然の恵みを活かし、
循環させていくものづくりが
いまも生きている。



山の塩 長野県大鹿村

生産される塩のほとんどが
海水を煮詰めてつくられている日本で、
山で採れる塩があるのを「存じだろわか。
岩塩ではない。
海から遠く離れた内陸部、
標高650メートルの山の中に
塩泉が湧いているのである。
明治時代の初め「白い山師」と呼ばれる人たちが
岩塩を探して山を調査し、
掘った夢の跡はいまも残り、
山塩と呼ばれる塩は、村の新たな希望となっている。

黒部銚次郎らが岩塩を探すために掘った横坑

つまもの 徳島県上勝町

過疎化と高齢化の進行、
自然災害による主要産業の枯渇。
山間部の町全体が途方に暮れていたとき、
農協の若手職員が提唱したのが
「葉っぱビジネス」だった。
新しい地域資源を軸にしたビジネスモデルによる
上勝町の再生は、同様の課題を抱える地域のみならず、
行政や経済界まで幅広く注目され、
上勝町は葉っぱの町として
その名を全国に知らしめている。

正木ダムが完成する前の上勝町 (志破純子さん提供)

和楽器絃 滋賀県長浜市

琵琶湖の北、賤ヶ岳山麓にある
伊香郡木之本町(現長浜市木之本町)は、
水上勉の小説「湖の琴」の舞台でも知られる。
生糸農家に奉公に来た若い男女の悲恋の物語は、
映画やテレビドラマになり、
湖北地方の和楽器の絃づくりが
広く知られるようになった。
この地ではいまも人の手によって
繭から原糸がつくられ、
さらに絃にするために10以上の工程が
手作業で行われる。

昭和50年代の駒燃り風景 (丸三ハンモト株式会社提供)



山里の秘湯に復活した、大鹿村の塩



湧くのか。その答えは中央構造線の境界上に位置するという特殊な立地条件にある。大鹿村中央構造線博物館の学芸員、河本和朗さんが説明してくれた。「かつてここは海だったのかとよく聞かれますが、塩分を含んだ水が必ずしも海水というわけではありません。中央構造線とは日本列島の西半分を縦断する巨大な断層で、大鹿村周辺では地形と断層がはつきりと確認できます。フィリピン海プレートが誕生した際に、できた岩石に含まれている水がマントルに沈みこむ際に放出され、地下深いところから断層などに沿って上昇してきたと考えられています」。

ここでつくられる塩は「山塩」と呼ばれ、いまに続く製塩の始まりは明治初期にさかのぼる。旧徳島藩士の黒部銃次郎が、塩泉が湧く地に岩塩があると信じて鹿塩地区にやって来ると、温泉「山塩館」を営む平瀬長安さんの祖父らの協力を得ながら山を掘削し、岩塩発見に執念を燃やした。結局発見することはできなかつたが、生活のために始めた湯治場や製塩などいまにつながる足跡を残すことになった。

明治末期に専売制が施行されると製塩が禁じられ、その後長く途絶えていた。

大鹿村の鹿塩地区は、地名の通り鹿の里・塩の里を意味する温泉地である。この源泉は海水とほぼ同じ濃度の塩分を含む「塩泉」で、塩はこれを煮詰めることでつくられる。太古の昔、諏訪大社の祭神「建御名方命(タケミナカタノミコト)」が鹿狩りをしたときに塩泉を発見したと伝えられ、南北朝時代に宗良親王がこの地を拠点に選んだのも、塩があったからと伝えられている。

海から遠く離れた山里に塩泉がなぜ

しかし1997(平成9)年に規制が緩和され、「祖父から、この地の井戸からくみ上げて炊く塩は雪のような結晶になる」という話を聞いたことがあり、祖父がどんな塩をつくっていたのか興味があった。平瀬さんが、当時のやり方を再現する方法で塩づくりを復活させた。現在、村内では他の事業者も塩づくりを手掛けているが、「土地の自然がもたらしてくれた塩はこの村の宝です」(平瀬さん)。



山塩館提供

DATA

大鹿村は、南アルプスのふもと、下伊那の山間にある人口約千人の小さな村。自然に囲まれた日本の原風景ともいえる山里は「日本で最も美しい村」連合加盟町村のひとつである。また大鹿歌舞伎は江戸時代から受け継がれてきた地芝居で、国の重要無形民俗文化財に指定されている。



過疎の町を変えた、上勝町の「葉っぱ」

上勝町は大小55の集落から成る、四国で一番人口の少ない町で、山林が町面積の9割近くを占めている。かつて町の主な産業はミカン栽培、林業などで、特にミカン栽培は農産物出荷額の3割を超え、町の経済を担っていた。

しかし1981(昭和56)年、未曾有の大寒波が町を襲い、主要産業であったミカンの木が壊滅してしまう。花き栽培農家の高尾晴子さんは、当時の町の雰囲気について「町全体が『これどないなるんかいな』『何したらいいんか』との思いを募らせていた。野菜や切り干しを作るなど、一時しのぎでいろいろなることをしていた」とショックの大きさとその後の苦闘

ぶりを語ってくれた。

どん底だった上勝町を蘇らせたのが、現在、株式会社いるどり代表取締役社長を務める横石知二さんが仕掛けた葉っぱビジネスである。

横石さんは大寒波の2年前に上勝町農協へやって来た。甚大な被害に対し横石さんが農業振興計画に取り組み際に重視したのは、すぐに現金収入が得られる短期の作物を多品種少量生産することであった。



そんな中で目を付けたのが、山々に無尽蔵にある葉っぱだった。日本料理を美しく彩る「つまもの」として出荷しようというアイデアである。ミカン栽培をやめて葉っぱを売るといふ横石さんにほとんどの農家は「タヌキじゃあるまいし葉っぱが金になるわけがない」と取り合わなかった。それでも高尾さんから4軒の農家の協力で始め、初年度年商116万円ですタートすると大きな成長を見せ、現在では175軒の農家が参加し、300品種で年商3億円弱の町の基幹産業に成長した。上勝町のつ



まものは全国トップシェアを誇る。

横石さんは謙遜して「葉っぱ」というが、大きさや色で細かく規格化、美しくパッケージされて出荷されていくつまものは、ITを活用した高度なシステムと、農家のノウハウや研究、努力が結びついた全く新しい農業ビジネスなのである。

葉っぱビジネスは山林の姿も変えた。上勝町の山林は8割以上が杉を主体とした人工林だが、広葉樹の葉を商品とするビジネスがおのずと広葉樹林への回帰を促すことになり、横石さんも「これが日本の本来の里山の姿です」と話す。

DATA

徳島県勝浦郡上勝町は県の中ほどに位置し、徳島市の中心部から南西へ車で約1時間40kmの距離にある。2003年9月にゼロ・ウェイスト宣言(ゴミゼロ運動)を出し、また住民参加型のバイオマス利活用にも取り組んでいる。



至高の音色を生みだす、湖国の絃

明治以降、日本は大量の生糸を海外へ輸出してきた。当時、養蚕業・絹糸生産は貴重な外貨獲得産業として近代化の礎を築き、農家にとっても養蚕は貴重な現金収入源であり、全国各地で生産されていた。しかし太平洋戦争以降、化学繊維の発明や安い輸入生糸の流入により、産業としての養蚕・製糸業は衰えていく。湖北地方も同様に衰退は免れなかったが、ここ木之本地区では独特の糸づくりがいまも行われ

ている。それが、三味線、琴、琵琶など和楽器用の絃づくりである。

全国で生産された生糸のほとんどは絹織物のための糸で、バラツキのない均質さが重視される。均質な糸ほど美しい織物になるからである。しかし楽器用の糸は事情が異なる。楽器が求める糸の性質は織物用とは異なり、機械による大量生産ができない。そのため楽器用の生糸は特殊製糸と呼ばれ、重要な糸取り工程を「座

繰(ざぐり)」という昔ながらの手作業で行う。木之本周辺では現在もこの方法が伝わり生糸がつくられている。

丸三八シモト株式会社は木之本で110年にわたって和楽器糸をつくり続け、商品の種類は400以上に及ぶ。和楽器には三味線・琴の他多くの種類があり、使われる絃は全て違う。さらに同じ楽器でも細かく種類が分かれる上に、地域や流派によっても求められる音色が違っている。およそ12の複雑な工程はほとんどが手作業のため、熟練した技が不可欠である。

同社4代目社長の橋本英宗さんは糸づくりの難しさを次のように語っている。「絃は何本もの生糸を撚り合わせてつくりますが、どういう撚りをするか、どういう固さにするか、どうすれば求められる音色に合わせられるか



が難しい。基本は代々伝えられてきたが、音色は感性のものなので、文字や数値で残せないのです」

いまは中国の演奏家の求めに応じて、中国の古典楽器の絃も手掛けているという。湖北木之本の絃の舞台は広がる。

DATA

木之本地区は古くから北陸と京都を結ぶ要衝地として発達し、京都や奈良へ向かう渡来人も訪れ、生糸づくりの技術を伝えたともいわれる。江戸時代には北國街道の宿場町としてにぎわうなど、多彩な歴史と文化を醸成してきた土地である。

PICKUP

入手資料の紹介

帝国興信所秋田支所が発行した 英会話の教科書

帝国興信所(帝国データバンクの前身)の秋田支所が1946年2月に発行した英会話の教科書を入手いたしました。

書名は『すぐ役にたつ日米新會話 中等部用 PRACTICAL ENGLISH CONVERSATION』。秋田支所が主催した英会話講習会のテキストとして利用されたようです。発行人は当時の支所長、藤澤實です。

どのような経緯でこのテキストが作られたのかについて、引き続き調べていく予定です。



帝国興信所札幌支店編集の 『昭和43年度高額所得者名簿』

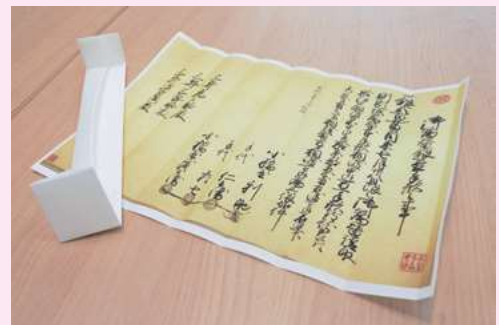
倒産情報誌『北海道版帝興情報』の臨時増刊号として1969年に発行された、『昭和43年度高額所得者名簿』(帝国興信所札幌支店編集)を入手いたしました。北海道内の年収500万円以上の所得者を、30の税務署別にリストアップした名簿です。2507名の氏名や住所、職業が、当年所得額順に掲載されています。

1日体験古文書講座開催のお知らせ

当館では、江戸時代の為替手形をテキストに、初心者向けの古文書講座「はじめてのくずし字～老舗の経営史料 為替手形を読み解く～」を開催します。1字1字丁寧に解説しますので、はじめての方もお気軽にご参加ください。

- 日時:2019年2月21日(木) 13:30～15:30(受付13:00～)
- 対象:古文書初心者
- 講師:当館学芸員(元NHK文化センター・産経学園講師)
- 会場:帝国データバンク史料館 講習室
- 定員:100名(先着順)
- 受講料:無料
- 応募メ切:2019年1月31日(木)必着
- お申込み・お問合せ:帝国データバンク史料館(Tel:03-5919-9600 E-mail:shiryokan@tdb.co.jp)

※詳細は、帝国データバンク史料館ウェブサイトをご覧ください。TDBカレッジ (<https://www.tdb-college.com>) からの申し込みも可能です。





帝国データバンク史料館

〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町14-3 TEL.03-5919-9600(直通)

ご来館の際は、1F受付にお越しください。

ご利用案内

- [入館料] 無料
[開館時間] 10:00～16:30 (入館は16:00まで)
[休館日] 土・日・月曜日および祝日、年末年始
(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。)

交通のご案内

- [JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅 徒歩8分
中央線 四ツ谷駅 四ツ谷口から徒歩9分
[地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分
都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分
丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し付けください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介しています。

www.tdb-muse.jp